

# 川端康成の文学活動／経済活動をめぐる覚書

山本芳明

## はじめに

市場経済が一般化し、すべてが金銭と交換される商品となってしまう近代社会において、作家も文学市場の生産者ではない。副業や正業をもっていない限り、生計を立てるためには、文学作品を出版社に売るしかない。文学活動は経済活動でもあった。文学市場が活性化し拡大しているときには、作家はそのことを意識することはほとんどなかったろう。しかし、文学市場は好況期ばかりではなかった。<sup>(1)</sup>川端康成は「文学的自叙伝」〔新潮〕昭9・5)の中心でこう振り返っていた。

(前略) 私の一高入学前後に「白樺」の人道主義が興隆し、芥川氏、久米氏、菊池氏等の「新思潮」組が登場し、私達が同人雑誌から新人として認められた頃は、大戦後の好況で文壇の「黄金時代」、従って世に出るやさしさは今の新人の比ではなかったが、やがて純文学者「飢死」論が現れるほどの反動の不景気の底に落ち、かたはら

プロレタリア文学の攻勢あり、大衆文学の流行次ぎ、文士の花やかさの食膳の匂ひをかがされただけで、青春十年の貧乏暮しは、私達の性格や作品、少くとも健康には、馬鹿にならぬ関係があると思ふ。今東光氏や片岡鉄兵氏などは暮しが派手に見えたこともあつたが、十年の友人は皆苦しく狭い生活を続けて来た。

川端の「一高入学」は大正六年九月であり、文壇的に注目された「招魂祭一景」（「新思潮」）が発表されたのは大正十年四月である。川端は大正中期以降の文学活動／経済活動の軌跡をほぼ正確に描いている。修正・補足する必要があるとすれば、「文壇の『黄金時代』」が大正八年に始まり、九年三月から日本経済が不況に陥っても好景気を持続していたこと、失速し始めたのが十三年だったことである。

そして、いわゆる円本ブームによって雑誌や単行本の市場が縮小して、昭和初年代に作家の「貧乏暮し」が深刻なものになったことも見逃せない。雑誌の休刊や廃刊が相次ぎ、原稿料を払う雑誌が「中央公論」「改造」「文藝春秋」「新潮」に限定された時期もあった。広津和郎は「のんきな執筆業者」（『東京朝日新聞』昭3・7・8～11）や「文士の生活を嗤ふ」（『改造』昭5・7）で、この事態を明らかにし、文学市場でサバイバルをかけた（椅子取りゲーム）が行われていることを指摘していた。

例えば、「文芸時代」の同人だった諏訪三郎は「中央公論」の編集者木佐木勝に「なんでも書きまくるつもり」だが、「不況がたたって雑誌社のほうが落ち目になっているので原稿のはけ口が悪く、思いどおりにいかない」と嘆き、「今朝も思い切ったある雑誌社の社長の自宅を訪ね、原稿のことで相談をしたが、ていよくあしらわれてしまった」（昭3・2・5付、『木佐木日記』第三卷、現代史出版会、昭51・7刊第2刷）と告白していた。

「文学的自叙伝」の「青春十年の貧乏暮し」はこうしたサバイバルゲームをふまえたものである。ただし、川端が諏訪のような深刻な体験をしていたとは思われない。「作品年表」（『川端康成全集』第三十五卷、新潮社、昭58・2

刊)を見れば明らかのように、川端は原稿料を支払ってくれる新聞や雑誌に継続的に発表していたからである。

諏訪が苦闘していた昭和三年、川端は二二編の短編小説(掌の小説は11編)を発表し、普及版『伊豆の踊子』(金星堂、昭3・10刊)も刊行していた。あるいは、川端秀子は昭和五年三月頃から六年四月までの桜木町「四十九番地時代」のこととして、「手持ちのお金がなくなりますと、主人が徹夜で書き上げた原稿を持って」、新潮社や講談社に行って「私が原稿料を頂いてくるという具合でした。」(「川端康成の思い出(九)」「川端康成全集附録」昭55・10)と回想している。

川端は諏訪とは異なって、出版社に原稿を持ち込めば、確実に換金することができた。川端がいかに優遇されていたのがわかる。川端が「貧乏暮し」をしていたとしたら、諏訪とは別の要因があったと考えざるを得ない。川端の文学活動／経済活動を当時の典型とすることはできないのである。

本稿では、川端康成の、昭和戦前・戦中期の文学活動／経済活動の実態を確認して、その活動と消費行動との関係、それら三つの座標軸の間に描かれた、川端の独特の軌跡を明らかにしたい。ただし、現段階では、調査に行き届かない点が多く、不十分な考察にとどまっている。タイトルに「覚書」をつけざるを得なかった。

川端の引用は、『川端康成全集』全三五巻補巻一卷(新潮社、昭55・2〜59・5刊)によった。

## 1

まず、川端の定職について確認しておこう。川端香男里編の「年譜」(『川端康成全集』第35巻)によれば、川端は昭和五年、「菊池寛が四月に文化学院文学部長となり、その縁で、創作科講師として週一回出講を引き受けた(昭和

九年三月まで勤める。日本大学の講師も兼務した。秀子が紹介している川端の日記（昭5・11・26）から、文化学院の月給が「五十円」（川端康成の思い出（十三））前掲誌、昭56・2）だったことがわかる。これ以外に定職には就いていなかったと思われる。

それでは、川端を「貧乏暮し」に追いやった要因を考えていきたい。第一にあげられるのは、川端が遅筆だったことだろう。遅筆であることは執筆量の少なさに結びついている。秀子は「海の火祭」（中外商業新報）昭2・8・13〜12・24、全129回）の「連載が始まりますと大変でした。書きだめなんてできませんで、原稿が夜のうちに出来上りますと、朝六時に起きて挿絵を書いて頂くために絵描さんのところに毎日届けに行きました。」（川端康成の思い出（五））、前掲誌、昭55・6）と回想している。

「女性開眼」（報知新聞）昭11・12・11〜12・7・23、全223回）の連載中には、「車を待たせておいて、原稿が出来上ると私とその写しをとり、原稿を車で鎌倉駅まで持って行ってもらいました。何時の電車で送ってください、という頼み方です。その頃あった鉄道便を使ったわけです。家賃が三十円くらいの時に、車代が四十円くらいかかった」（川端康成の思い出（十八））、前掲誌、昭56・7）という。しかも、運転手が鎌倉駅だけでなく直接新聞社に届けている日もあった。つまり「連載一日分を二度に分けて送っている日もあ」ったのである（続・川端康成の思い出（一））、前掲誌、昭59・4）。

川端は新聞連載だから書き悩んでいたわけではなかった。文芸雑誌、総合雑誌、婦人雑誌、少女雑誌などでも同じだった。「禽獣」（改造）昭8・7）について、秀子は、川端が書けたのは「改造」の編集者をしてた徳広巖城（上林晔）のおかげだとして、「もう一日待ちますと言ってのばしてくれ」、「次の日、絶体絶命のところまで書き上げることができ」た（川端康成の思い出（十四））、前掲誌、昭56・3）と回想していた。

あるいは、秀子は「美しい旅」(「少女の友」昭14・7〜16・4、全21回)の第一回の執筆について、「一日に一枚、二枚ぐらいいしか書けず難渋していましたが、締切直前で二十枚ほどやっと渡すという状態でした。」(「川端康成の思い出」(二十一)、「前掲誌、昭56・10」と述べていた。

こうした遅筆は、別の問題を発生させていた。つねに締切りギリギリで執筆しているため、多くの作品が〈未完〉のまま発表されることになったのである。

川端は「文学的自叙伝」で、「私の小説や随筆には序の口で尻切れてゐるのが実に多いと言ふよりも、完結したものを発表出来ることは稀だと言つた方がいくらゐるだ。」と述べ、「水晶幻想」は雑誌へ二回に分載して尙未完、『父母への手紙』は五回分載の未完、『慰霊歌』は序章に過ぎず、『禽獣』は後半割愛ゆゑ改稿を要する。(中略)新潮社版の『花ある写真』中の『死体紹介者』と『温泉宿』、共に三四回分載で、そのための失敗は歴然と残つてゐる。」と、自ら断じていた。

川端は「これは聯想の流れに従ひがちな私の作風のせるばかりでなく、「私が第一行を起すのは絶体絶命のあきらめの果てである」からだ」と説明していた。十分なプロットを事前に用意できずに、執筆中の「聯想の流れ」にまかせてしまう「作風」の問題はあるものの、締切りギリギリでなければ書き出せないことが決定的な要因なのである。

川端が〈未完〉の状態で発表した作品を完成する機会は単行本に収録するときだった。川端は「自著広告」(「文学界」昭10・2)で、「雑誌社にも、読者にも、批評家にも、申訳なき次第ながら、単行本といふ清書があると、自らは僅かに慰めてゐる」と告白していた。

しかし、川端が「数多く書く割に、本を出すことが出来ない」(同前)と述べていたように、「清書」の機会を作ることは容易ではなかった。というのも、彼の執筆方法には別の問題があったからだ。川端は自宅以外の別の場所で執

筆しなければならず、描こうとする世界に実際に行ってみなければ書けないという現場主義があり、そのうえ、文献資料を含めて徹底した取材をしなければならないという完璧主義までもっていたのである。

川端は「私の七箇条」（『文章倶楽部』昭4・2）で、「私の小説の大半は旅先で書いたものだ。風景は私に創作のヒントを与へるばかりでなく、気分の統一を与へる。宿屋の一室に坐ると一切を忘れて、空想に新鮮な力が湧く。一人旅はあらゆる点で、私の創作の家である。だから私を縛りつける家庭や、養はねばならぬ家族を怨むことおびたしい。」（『旅行』）と述べていた。

この文章には「一人旅」の気楽さや楽観主義的な雰囲気も漂っているが、昭和十年に、湯河原温泉翠明館から佐藤碧子に宛てた書簡には全く別の側面が浮び上がっていた。「全くの孤独へ追放されぬと、仕事出来ません。サンタンたる心境。」とあって、「家に籠つて腹を立てても、睡眠が乱れるばかり、原稿は一枚も書けず、金は天から降つて来ず、質入れして、土曜日湯河原に来ました。」（昭10・10・25付）と述べている。

同様なことは秀子宛の書簡（昭10・11・25付）でも「旅先で一人切り離されればそれでいいのだ。ヴァレレイといふ人が書斎に入り、外から細君に鍵をかけて貰ふのと同じ。」と述べていた。しかし、川端はヴァレレイとは違って、自宅の書斎に閉じこもって外界を遮断すれば、仕事ができるわけではなかった。

秀子は、昭和三年五月に大森に引っ越した頃、「毎日仕事をしにホテルに通って」おり、「いくら原稿料をもらつても足りな」かったと述べていた（『川端康成の思い出（六）』、前掲誌、昭55・7）。秀子は、昭和十一年に「鎌倉暮しが始ま」ってからのこととして「仕事に追われると鎌倉の香風園や鶴沼のあづまやという格式の高い料亭旅館へ行くということになります」、「菊池寛さんはじめ皆さんがそういう仕事の仕方を心配してくださいましたが、そうしないと書けないような癖がついてしまつていたようです。」（『川端康成の思い出（十七）』前掲誌、昭56・6）と述べ

ている。

そして、孤独な状況を作るために旅に出ることは、作品の舞台として想定している地域で取材するべきであるという現場主義にも結びついていった。例えば、昭和十年十二月の上諏訪の布半ホテル別荘からの佐藤碧子宛書簡では、「相変らず宿賃稼ぎの旅です。若草の小説中の人物が富士見に来てしまつてるので、来ずには書けませんでした。(中略)湯河原で弱つてると、ふと湖に写る花の影が心に浮び、花の湖と題して書き出しました。毎月一つづつ変つた湖水を見て歩く、それをせめてもの楽しみに書く予定です。」(12・24付)とあった。

こうした現場主義は、すでに「海の火祭」執筆の際にも実行されていた。川端は『海の火祭』は逗子の鎌倉の夏の海から書き出し、江の島の灯籠流しにつづいてゐる。私は海水浴場を写生するために、逗子のホテルや鎌倉の海浜ホテルに滞在した。」(「独影自命 十二」『川端康成全集』第十二卷、新潮社、昭26・4刊)と回想していた。

また、『浅草紅団』続稿予告(「文芸」昭9・7)では、「朝日新聞紙上の『浅草紅団』の筆法」と同じく、「やはり今後幾月か浅草に日参して、そのスケッチを背景としたい。」として、「まだなんらまとまつた腹案もない。浅草をさまよふうちに自ら浮び上がる印象を、その日その日多少小説的に組み立てるだけである。」と述べている。

川端の現場主義や完璧主義がもっとも発揮されたのは信州取材だろう。川端は「平穩温泉だより」(「文学界」昭11・12)で、「信州の地形」を知るために購入した地図が四三枚あり、「これを普く踏破しよう」という決意を語っていた。そして自分の「其土地の人情風俗を知る第一課」は「地方新聞及び東京新聞の地方版を丹念に読む」ことであると、長野県の最近のトピックを紹介していた。

あるいは「戸隠山にて」(「文学界」昭12・11)で、取材のねらいや方法についてこう説明していた。「中央線沿線から信越線沿線へ、つまり南信から北信へと昨年の秋四十日余りさまよひ歩いたのは、映画会社から頼まれて信州に

取材したシナリオを書くためであつた。シナリオは簡単な荒筋でいいので細い描写など必要としないのだが、撮影すべき景色や風俗やまた坐業を実際に見て廻つて写生しないと私は気がすまぬたちなのである。素人が見てよいと思ふものと映画に写してよいものとのちがふことは分つてゐても、私の知らぬ地方にはどのやうに面白い暮しがあるか行つてみなければ分らない。作家の空想は実在の世界より豊かであると云へぬことはあるまいが、私などの空想はまことに貧しいものである。そのシナリオは遂に出来なかつたものの、ちやうど収穫時の百姓の働きなどを見物しながら、なにか心に学ぶところはあつた」。

長野市を中心とした取材について、『牧歌』を書くにつれて昨秋から今年にかけ長野市の内外はあらまし歩き、大門通の裏の問屋町は家構への立派な家が多いので例によつて商店名と商品と主な家の模様を軒並にノットした、「小説の中にはまだ使はぬから、恐らくなんの役にも立たぬことだらう。（中略）しかしながら、ただ、『長野市』と三字を書く場合にも、作家の私の心の奥には私が見ただけの長野市が拮つてゐてくれ、それはまたどこかで読者にも通じることがあらうと思ふのである。」と述べていた。

しかし、こうした取材の成果は常に先送りされることになる。「旅中」（『文学界』昭13・6）で、川端は「戸隠は一月で、つまり雑誌に連載の一回分ですますはずであつたのに、半年以上かかつてしまつた。或る土地を書くには、その土地を見て来たノットや参考書では足りず、その土地に滞在しながら書くといふのでないと思ふ。或る土地を書くには、いろいろ不便なことが多い。季節もやはり執筆中の季節でないと書きにくいのである。」と述べていた。同時に、「信州の小説は、まあ四五年がかりでゆつくり書くつもりだから、そのうち鉱脈にもぶつつかるだらうと楽しみにしてゐる。」とあるように、取材が作品執筆と直結しないことも自覚していた。取材すること自体が自己目的化していたことが見えてくる。自ら「私の病癖」（『戸隠山にて』）という所以である。

こうした執筆方法を実行するために必要なものは何だろうか。答えは金である。経済力がなければ、滞在費・取材費など、もろもろの経費を長期間まかなうことはできない。川端は『浅草紅団』の筆法（『浅草紅団』続稿予告）を説明したときにその問題を端的にこう指摘していた。「ただ一の私の憂へは金である。前記のやうな小説作法は、人知れぬ金がかかるのである」、『浅草紅団』も「金さへあればもつといいものが出来たはずだ。朝日新聞の少なからぬ稿料も、私の働きを十分にはさせてくれなかつた」、「知りたい、書きたいと思ふことを、金のないためにごまかし、避けて通ると、作家的良心が傷つき、意気沈衰し、興味索然とし、もう後は収拾し難い。予め準備するよりもその時々之感興に従つて動き、实地見聞の土台に空想を咲かせる作法では、動かせたり見聞させたりしてくれる金がなければ、艦權を失つた船である」。また、川端は「書くための費用がないために書き損つた作品も私には少くない。」（『独影自命 十二』）とも主張していた。

それでは、川端の文学活動の収支を具体的に確かめてみよう。

## 2

川端の文学活動のパターンを昭和九年六月の秀子との往復書簡から検証してみよう。当時、川端は引越し費用と引越し先の改築費用を必要としていたが、その対応を秀子にまかせて、上越線上牧駅前の大室温泉旅館に執筆のため滞在した。川端はここで執筆する予定の原稿料を引越し費用などにあてることは考えていなかった。秀子は文藝春秋社から借金をしたことを報告している（6・10付書簡）。

川端は大室温泉旅館に「三食つき三円」で泊ったが、「飯が不味くて、この家は長く辛棒出来さうない。越後から

来る肴など食へない。」と不満をもらしている。そして、原稿と原稿料の処理の仕方をくわしく指示している（6・10付書簡）。「改造の原稿明十一日と十二日とに鉄道便で送る 配達付か、駅止か、早い方にするが、駅止なら、電報打つから、駅で受け取り、直ぐ印刷所へ届けて貰ひたい、十二日外出せず家にゐてくれ。／改造の借金は、本代の方か、小切手五十円の方か、いづれか一方だけ今度返すことにして貰ひたい、三十五枚くらゐ書いたとして、百円足らずしか残らぬが、こちらへ電報で三四十円送つてほしい。今手もとに二十五円くらゐ持つてゐる」。

川端ができたあがつた原稿を出版社や印刷所に届けて、出版社から原稿料を手にするまで、秀子が介在しなければ成り立たない複雑な手順が必要だったことがわかる。また、改造社に一〇〇円近い借金があり、原稿料が入る度にその一部を返済していることが見えてくる。そして、原稿を送るためにはもう一手間必要なことが判明する。

川端は十一日に鉄道便で原稿を送ろうとして、上牧駅ではうまくいかないことを発見した。「今朝の原稿は、徹夜の朝六時に自動車で水上駅へ出かけ、湯原の局へ電報打ちに廻り、疲れてるから自動車で帰つた。明朝もその通りしなければならぬ。この駅では電報もとりあつかはぬ。原稿送るに五六円かかるわけだ」（昭9・6・11付書簡）。しかし、川端は「上野駅止の原稿鉄道送りは、僅か十五銭それに早いから、今後これにするかもしれない。電報打つ度、駅へ取りに行き、社へ届けて稿料貰つてほしい。僕の分も少し残してといてくれ。」（同前）と述べて、手順を確定している。

秀子の返信から、秀子が川端の指示通りに対処したこと、川端が「改造」だけでなく「文学界」の原稿も送ったことがわかる。秀子は改造社から「小切手の分だけ引いて九十円頂き」、川端に「四十円だけ電報為替」で送ると連絡している（昭9・6・14付書簡）。川端の想定通りの金額（140円）を手にしたことが確認できる。また、「文芸」の「稿料二十円」を米屋等の支払いに使ったことも報告していた。当然ではあるが、川端は滞在費や取材費だけでな

く、留守宅の生活費なども稼ぐ必要があった。秀子は川端に生活費ついて細かく報告していた。<sup>(2)</sup>

川端は「改造」・「文学界」を執筆後、越後湯沢の高半旅館に移動する。宿や通信状態がよいからということもあったが、「帰りたくもあるが、帰れば仕事出来ぬかもしれず、この暑さで尚更のこと。これから湯沢温泉に行くことにした。せめてモダン日本と婦人クラブだけでも書き上げる。でないと小さな借金だらけ忽ち困る。少しでもほつと片づくやうにする。」(昭9・6・15付)ということからだった。

しかし、「今ここの払ひをすませると有り金十五六円、こいつは少々心細い。婦人クラブ書いたら、百円も送って下さい」(同前)とあるように、秀子が送った「四十円」では滞在費を精算すると、たいした金額は残らなかった。経費が川端の想定以上にかかっているのである。川端は、原稿料を稼ぐために旅に出たのであるが、執筆量が少ないと、旅を続けるために原稿料を稼ぐという本末転倒の事態に陥ることになるのである。

この旅から川端が帰京したのは六月二十一日頃と推定されているが、結局、発表できたのは、「南方の火」(「文学界」昭9・7)、『『浅草紅団』続稿予告』(「文芸」昭9・7)、「今日の作家」(「改造」同前)、「趣味の議論」(「東京日日新聞」昭9・6・19(22))、「水上心中」(「モダン日本」昭9・8)だと思われる。

旅費・滞在費・通信費・通信する労力・遅配などの通信障害からくるストレス・対価<sup>(3)</sup>を入手するまでの待機時間の長さ・留守宅の生活費などを考えれば、川端の執筆方法の経済効率の悪さが際立ってくる。菊池寛が心配し忠告したことも肯ける。

経済効率の悪さは執筆量とともに、雑誌の原稿料の安さも影響していた。改造社からの原稿料は一四〇円なので、川端の目算通りの「三十五枚」だとすると、原稿料は一枚四円だったことになる。<sup>(4)</sup>また、秀子の川端宛書簡から「文藝春秋」の原稿料が五円(昭9・12・12付、川端康成宛書簡)、あるいは四円であること(昭10・10・14付、同前)、

「日本評論」が四円八〇銭（同前）であることが判明する。

川端の執筆方法で雑誌に発表する作品を書いて、安定した生活を維持するのは至難の業だったことがわかる。それでは、新聞小説を連載した場合はどうなのだろうか。例えば、「海の火祭」の場合、川端は「最後の原稿料の三百いくらのお金」（川端秀子「川端康成の思い出（五）」）をもって熱海の別荘を借りていた。「海の火祭」最後の十回分とすれば、一回あたり三五円前後ということになる。また、「浅草紅団」十二回分と思われる原稿料が「三百何十円」だったことから（川端康成の思い出（八）」、前掲誌、昭55・9）、「東京朝日新聞」が一回三〇円払っていたと推測できる。「女性開眼」の場合は、川端の昭和十二年一月一日の日記から二十一回分の原稿料が「八百五十円」だったと推測されるので、単純に計算すると、一回約四〇円四八銭となる（続・川端康成の思い出（一）」、前掲誌、昭59・4）。

それぞれの原稿料の総額を推計すると、「海の火祭」は四五一五円、「浅草紅団」は一一一〇円、「女性開眼」は一回四〇円とすると、八九二〇円となる。いずれも、大金といっている。

しかし、川端の生活が楽になったわけではなさそうだ。すでに引用したが、「東京朝日新聞」の原稿料では取材費を十分に賄えなかったし、昭和十二年十二月に熱海に引っ越す際に川端が所持していたのは「最後の原稿料」だけだった。そして「女性開眼」の「八百五十円」は川端の日記の記述（昭12・1・1）によれば、年末の支払いを済ませれば「五十円」しか残っていなかった（続・川端康成の思い出（一）」）。

新聞連載小説をもってしても、川端の暮しを楽にすることはできなかったと考えられる。その原因は、一流のホテルや旅館に泊ることを含めて、取材費がかかったこと、実質的に二つの家計を支える時期が存在していたことなどを考慮する必要があるが、川端が収入以上の消費行動していたことをあげるべきだろう。

例えば、川端は「海の火祭」の「最後の原稿料の三百いくらのお金」をもって、熱海の別荘を借りて「半年ほど住」むのだが、「一ヶ月百二十円の家賃で、昭和三年の私には払へるはずのない大金であった」（『浅草紅団』について）「文学界」昭26・5）。それにもかかわらず、熱海に引越した理由は「人一倍寒がりの私はこの二三年東京で冬を越したことがない」（『熱海と盗難』「サンデー毎日」昭3・2・5）からだだった。

あるいは、川端秀子の回想では、結婚当初から川端の食事は、「鯛とか伊勢海老などをよくとりましたから、きっと魚屋は呆れていたと思います。（中略）肉はもうヒレ肉しか食べませんし、貧乏しているといってもそんな生活でした」（川端康成の思い出（四））前掲誌、昭55・5）。秀子は「お酒を飲むわけじゃありませんし、そんなぜいたくをしているという気持はありませんでした。」と述べているが、「ぜいたくをして」いたといえるだろう。

川端は自分の「ぜいたく」について、「私は浅草好みの一面、貧乏学生でありながら、芝居や活動は特等か一等、旅の宿は一流といふやうな虚栄があつた。田舎村の旧家だつた私達一族の血のせみだらう。」と原因を説明し、「割引の活動を見たり、汽車の三等に乗つたりが平気になれたのは、反つて三十前後このかたである。」と相対化できたと述べ、ついでに「『文芸時代』前後に得た友人の片岡鉄兵氏や池谷信三郎氏の贅沢は私などの比ではなかつた。」（『文学的自叙伝』）と、片岡らと自分を差異化していた。

しかし、この総括をそのまま信用することはできない。川端は満二十六歳のときに宣言したことを実践し続けていたと見た方がよいだろう。

川端は「一流の人物」（『文藝春秋』大15・7）でこう言い放っていた。「料理を食ふにしろ、芝居を見るにしろ、羽織を着るにしろ、安来節を聞くにしろ、歯医者にかかるにしろ、温泉宿に泊るにしろ、詩を読むにしろ、とにかく日々の生活に於て、一流のものを選んで味ふと云ふことは、精神生活者にとつて、有意義であるばかりでなく必要な

ことではあるまいかと、私は昔から考へてゐる。一概に贅沢だと云つて責むべきことではないと思つてゐる。（中略）或るものを肯定する場合にも否定する場合にも、そのものの中の一流どころの姿を頭に持つての言説には一種の力強い背景が感じられる。いづれにしても、一流のものはそれに接する人間の精神を高めることは確かである」。

秀子は、川端は「買い物となると、家に蓄えがあるうとなかうと見境がな」くなり、「行き当りばったり」の「衝動買い」をする人物だったと述べていた（川端康成の思い出（三十五）、前掲誌、昭58・2）。これは「一流」を我が物にしたいという欲望の現われなのではあるまいか。

秀子は「家計を預っている人間としては、もう少し計画的にきちんと買い物をしてくれたらという思いはいつもございました。」（同前）と嘆いて、戦中期の最大の買い物である軽井沢の別荘購入についても「衝動買い」の典型としていた。

しかし、秀子も「戦争中困った時に、この別荘を売ってしのいだのですから、この非現実的な衝動買いも、結果だけから見れば理にはかなっているのでしょうか。」（同前）と述べているように、別荘購入については、川端なりの「理」があったように思われる。少なくとも、取材費の使い方よりは〈現実的〉だった可能性がありそうなのである。

## 3

川端は執筆のため、取材のため、温泉地などの各地のリゾートに滞在していた。それは同時に開発の現場に立ち会っていたことでもあった。

例えば、「伊豆の印象」（『文藝春秋』昭2・6）では、「天城の猟場」が「二十五円」の入場料で「民間の人々にも

公開」されることになったと述べ、「この鹿狩りは近い将来に金持の新スポッツとなるだらう。」と予想している。そして「奥伊豆に壮大なゴルフリンクを拵へて一大楽園地を作る」という噂に触れて、「そんなことでもしなければ奥伊豆は遊樂地としても旅行地としても、余り有望とは考へられない。」と断じている。

あるいは、「伊豆温泉記」(「改造」昭4・2)では、熱海の「温泉つきの別荘地や町の目抜きき場所の地価」を「坪二百五十円から三百円」(「三 男女混浴」と紹介している。「熱川だより」(「文鳥」昭9・6)では、「熱海の御存じの樋口旅館の別荘」に泊って、熱川の変貌に驚いたことを報告している。川端は「熱川のこのあたり一帯も、土地会社の分譲地」となり、「その土地会社の経営で、樋口別荘の下の方に温泉宿も殖え、芸者屋まで出来るといふ話」だと報告している。「宿の一泊が四円、五円、六円、茶代廃止の給仕料一割」となって、「まことに熱海の別荘の名に背きません。」と述べ、「さういへば湯ヶ島も芸者屋が出来、ネオン・サインみたいなものがともされ、梶井基次郎全集中の姿とは、大分変つたさうであります。」と締めくくっている。

「平穏温泉だより」では、長野県によって建築されて、「京都ホテルの経営」となる志賀高原温泉ホテルの建築状況が報告され、「工費四十万円、発哺温泉から湯を引く工費十万円、三館建本館一二階は、この冬の間合ふはずで、やがてバスも通ふだらう。湯田中局から有線電話も建設されるさうである。野尻湖畔のホテルも竣工近いといふ。八海山その他新スキイ場も続々紹介されるらしい。」とあった。

このように川端は昭和戦前期から戦中期にかけてのリゾート開発を継続的に追跡していた。秀子は軽井沢の別荘購入を「衝動買い」の典型と見ていたが、川端が不動産市場の動向に注目し続けていたことは無視できない。そのうえ、川端が最初に計画していたのは別荘の新築だった。

昭和九年四月に秀子に宛てた書簡で、伊豆の「今井ヶ浜」が「那須温泉会社の分譲地」になっており、「少し波荒

いが海水浴も出来、伊豆舞子の称あるくらゐだから、温泉つきの別荘でも建てたいものだ」（昭9・4・24付）と述べていた。六日後の林芙美子に宛てた書簡では、「この間、伊豆の今井ノ浜でも、もう二日と滞在する金もないのに、土地会社の人に一万円もかかる別荘地を案内させて歩いて、磁シヤクを持つたり、家の建て方を詳しく話したりしてすると、もうここに永住の地を見つけたやうな楽しさでありました。」（昭9・4・30付）と述べていた。

このときは資金がないゆえに、佐藤春夫の「美しい町」（改造）大8・8（12）のように文学的想像を楽しんでいたともとれる。しかし、昭和十一年の軽井沢では全く異なっていた。川端は軽井沢に別荘を新築する計画を立てていた。

秀子宛書簡（昭11・9・3付）で、軽井沢に別荘を建てた室生犀星から新築する際の経費と注意点についてこうアドバイスを受けていた。<sup>(5)</sup>「室生さんの話では、家は坪八十五円くらゐでよいが、土台だけはしつかりせよとの話。他はどうにでも後で直せるが、土台だけは直せぬと」。

また、秀子に「設計の人へは、頼んでよろし。」と指示していた。ただし、「設計の人」が確定していたわけではなかった。九月八日付秀子書簡に「鷹穂さんも、確かで安い設計家と建築家紹介しようとかと云つてた。」とあり、秀子から「建築屋さんは板垣さんのおつしやる方がおよろしいやうに思はれますがいかがでせうか。御返事（佐藤氏紹介の方）次第でお手紙出します」（昭11・9・10付、川端宛書簡）とあった。

それが別荘購入に変わったのは、日中戦争の本格化による不動産市場の変動のためだろう。川端は秀子に「軽井沢各国大使は支那の件で引上げたさうだ。別荘はふさがつてゐるが、やはり支那で、主人の来てるぬ家多い」（昭12・7・29付書簡）と報じている。これは軽井沢に別荘を保有する〈外国人〉が日本を引き上げる際に財産を処分することになる予兆だった。後に、川端は「秋山居」（オール読物）昭15・12）で、「この夏から秋へかけてのありさまで

は、外人の家は大半、売家だと思つても差支へないほどである。」と、軽井沢で別荘処分が本格化した状況をレポートしていた。

川端は市場の動向をいち早く察知して、別荘新築から購入へ方針を転換したと見るべきだろう。ただし、川端が「戦争は大体十月か十一月に片づく予定の由。大したことはない。」(秀子宛書簡、昭12・9・21付)と判断していたかもしれないので、市場の動向を一過性の変化と思っており、決断を急いだ可能性もある。

いずれにせよ、川端は八月二十四日付の書簡で、秀子に「別荘買ふことに今日きめた。仙台からの返事でハ、百五十円まけると昨夜云つて来たさうだが、もう五十円位は下り、結局二千三百円にならうと今日三澤屋の話。」と伝えている。

この書簡で、川端は秀子に購入代金の残金についてこう指示していた。「金は、創元社へ五百円借金申込んだ。鎌倉へ電話で返事して貰ふ。貸してくれるなら、直ぐ貰つて、家の方から千円持つて(なるべく僕の方)都合千五百円にして、なるべく早く、(三十日前、幾日でも早い方よろし)持つて来てほしい。家の内よく見るとよい。他から借りることもあるが、面倒だから、後のこととし、創元社だけにしとかう」。

これが、軽井沢で最初に購入した不動産(軽井沢一三〇七番)である。注目されるのは、出版社の借金が「五百円」にとどまっていることだ。創元社から『雪国』(昭12・6刊、定価1円70銭)が出版されて、「発行後一年以上を経た今も、毎月五百部ぐらゐづつ増刷を続けてゐる。」(「あとがき」『川端康成選集』第五巻、改造社、昭13・10刊)という好調さだった。梶立神奈川近代文学館に二五刷(昭16・12刊)が所蔵されていることから、川端の発言を裏づけることができる。創元社も川端の依頼に無理なく応じられたはずだ。「五百円」は増刷六回で完済される金額である。

また、出版社からの借金が「五百円」にとどまっていたとすれば、残りは自己資金だったことになる。諸経費を考慮すれば、他に二〇〇〇円は必要だったはずだ。そのうちの一〇〇〇円はこれまで指摘されているように、文芸懇話会賞の賞金だったろう。しかし、川端の指示からすると、残りの一〇〇〇円は川端の貯金から支出されたと思われる。また、「なるべく僕の方」とあるので、秀子にも貯金があると思われる。

川端は昭和十五年に続けて軽井沢の二つの不動産を購入する。十五年秋に別荘を購入した。「軽井沢の別荘の隣の山小屋を一軒外人から買いました。（中略）これが戦後になって住むようになった一三〇五番の別荘で、当座は不動産屋を通じてドイツ人に貸していました」（川端康成の思い出（二十二）、「前掲誌、昭56・11」）。

川端の秀子宛書簡に「三澤屋には外人に貸すこと頼んで下さい。トウキ費用は後でいいといふなら後で送つてもよろし。なるべく早くトウキしてくれること。」（昭15・11・11付）とあって、当初から賃貸収入を得る予定だったことがわかる。登記料に神経質になっていないうえに、購入代金も心配している様子はない。

続いて、川端は十五年十二月に土地を購入しました。秀子は「野沢組の所有」だった「ゴルフ場前の土地」を「一度現地を見」たうえで、「結局暮の二十五日頃に買うことになりました。私が頂いていた改造社の『選集』の印税がそれにあてられた」（川端康成の思い出（二十二））と回想していた。

購入する際の資金となったのは改造社の『川端康成選集』全九巻（昭13・4、5、6、7、8、9、10、12、14・12刊、各巻定価1円50銭）だった。秀子の回想によれば、川端はこの印税を秀子にすべて渡したという。「この『選集』の印税を主人は私に全額くれました。大変今まで世話をかけたからみな君にあげるよ、と言ってくれました」（川端康成の思い出（二十））。登記料は「参千参百円」（昭15・12・31付、秀子宛書簡）だった。秀子の回想（『川端康成とともに』新潮社、昭58・4刊）では、選集の印税は一万二五〇〇円で、諸経費を含めて九九〇〇円が当てら

れたという。印税率一〇パーセントとして単純に計算すると、選集各巻の平均発行部数は九二六〇部となる。

二つ目の別荘の購入資金については、秀子の回想や書簡に言及されていない。土地購入が自己資金だったことからすれば、これも自己資金での購入と考えるべきだろう。芹澤光治良に紹介した別荘が「二千八百円」（秀子宛書簡、昭15・12・31付）だったことからすれば、この別荘も購入に際して三〇〇〇円前後必要だったろう。

秀子は、「昭和十五年の秋から暮にかけて、新たに別荘と土地を買いましたが、これなども思い立ったら熱中して買いこむという癖の現われ」（川端康成の思い出（二十三）、「前掲誌、昭56・12」）だと総括して、川端の「衝動買い」の典型としている。

しかし、川端がリゾートを中心とした不動産市場に一貫した興味を抱いていたこと、三つの物件をほぼ自己資金によって購入し、そのうちの一件を賃貸したこと、旧軽井沢ゴルフ場の前という好条件の土地を購入したことを考え合わせると、これらの購入を単なる「衝動買い」とするわけにはいかないだろう。

「秋山居」（前掲文）は、タイトル通り、秋の軽井沢を描いたものだが、一方では、外国人が日本から帰国しようとしているために動き出した別荘市場についてのレポートにもなっていた。川端は自分の購入した「山小舎のある雑木林」が「九百九十九年の地上権」だったことを入口にして、「軽井沢全体」で「この夏から秋へかけてのありさまでは、外人の家は大半、売家だと思っても差支へないほどである。」と指摘していた。「外人」の反応はアメリカ政府が昭和十五年十月に極東在住のアメリカ人に本国引き上げを勧告し、イギリス政府も続いたこと<sup>6)</sup>によって生じたものである。

また、川端は「帰国をいそぐ外人の売家が軒並といふほど多いから、定めし安からうと考へると、とんでもないまちがひで、法外に高いのである。仲介者が吊り上げたのでなく、外人の所有主の言ひ値が仲介者をてこずらせるので

ある。一般に土地家屋は暴騰してゐるし、為替関係があるにしろ、軽井沢としては馬鹿らしい値だ。決してうろたへた投げ売りはしない。落ちつき払つて勘定高い。私などは感服もするが、不愉快でもある。思ふ通りに売れなければ売らずに帰国するし、戦争がすめばまた来られると言ふ。」（同前）と述べている。

こうしたコメントは軽井沢別荘購入希望者に対するアドバイスになっていただろう。宮原安春の『軽井沢物語』（講談社文庫、平6・7刊）によれば、昭和十六年の軽井沢は賑わっており、堤康次郎の箱根土地が別荘造りを続けていた。「信濃毎日新聞」は新築の土地別荘の相場を「五千円」（昭16・7・13）と報じていたという。

川端は、「小島政二郎氏に頼まれてもゐるので、例によつて、売別荘を見て廻りました。小島さんは明日見に来るさうです。私もまた一軒掘り出しものをするかもしれません。」（片岡光枝宛書簡、昭15・10・8付）とあるように、投資する物件を探していた。おそらく、購入した一三〇五番がその「掘り出しもの」なのだろう。

そして、川端は小島以外の作家、芹沢光治良、堀辰雄、林芙美子、中里恒子、志賀直哉などに軽井沢の別荘の紹介や周旋をしていた。特に、川端は、昭和十六年十二月十六日に成立した敵産管理法によって没収された大蔵省管理下の物件に注目していたと思われる。顕著な成功例としては、志賀が「三万円」（志賀康子宛志賀書簡、昭17・9・8付）で購入した、七万七千余坪といわれる広大な別荘があげられる。

川端は軍需景気の中で活性化していた別荘を中心とする不動産市場に注目していたのである。軽井沢の土地の登記料を報告した秀子宛書簡（昭和15・12・31付）には、「もう一人の山田さん例の梅林横の地所の件で、市役所の助役室にて談判の最中だといふ。つまり他の方からも二三の運動あり、一万円ばかりせり上つてゐる。それをこちらへ取るため、僕の肚をきいてくれとのこと。五万円が六万円になったところで、坪一円か二円の上りだから大したことはないが、何しろ金なしだし、また地所かと思つたが、それは大体まあよからうと言つておいた。山田さんが他の話は

ぶちこはしたさうだから、文士連中の方で買ふ事になるのかもしれない。金がありさへすれば買って置いて絶対に損無のだが、まとめてハ今無論小生には出せさうにない。」ともあった。<sup>(8)</sup>

ここから、川端が「絶対損無し」の投資として不動産を見ていること、「また地所か」とあるところから、軽井沢の土地を購入したのも投資としてであったこと、そしてあくまで自己資金による投資を考えていたことがわかる。

昭和十九年に川端は、最初の別荘（一三〇七番）を売却した。収入減に対応するためだったが、売却額は購入額の十倍を越えたとと思われる。川端は「日記」に昭和十九年七月二十日のこととして「軽井沢三澤屋より電報、二万七千円にて如何と。電話にて大体承諾の旨返事す。」（昭和十九年・昭和二十年 自由日記）と記載していた。結局、このときの売却は不調に終わったが、売却の際には「二万七千円」が目安となったはずだ。この別荘は「二千三百円」で購入されていた。

川端は昭和十二年以降、文学活動によって得た資金によって、新たな市場に参入したのである。もちろん、川端が不動産売買で生計を立てていたなどは考えられないが、単に非合理的な「衝動買い」を繰り返していたとも考えにくい。川端は文学活動から得た資金を一定の合理的な判断で投資していたと見た方がよいと思われる。

それでは、川端は不動産購入に投資した資金をどのように得ていたのだろうか。

#### 4

前節で考察したことから見て、少なくとも昭和十二年以降、川端は「文学的自叙伝」で嘆いていた「貧乏暮し」から脱出したと考えられる。それをもちらしたのは、新聞・婦人雑誌・少女雑誌に併行して連載小説を発表できたこと、

そして単行本を安定して刊行できたうえに、『雪国』のようなヒット作が生れたことだと思われる。

例えば、連載小説としては、「女性開眼」、「牧歌」（『婦人公論』昭12・6～13・12、全19回）、「乙女の港」（『少女の友』昭12・6～13・3、全10回）、「花日記」（同前、昭13・4～14・3、全12回）、「美しい旅」、「旅への誘ひ」（『新女苑』昭15・1～3、5～9、全8回）、「婦人公論」に発表された九つの短編（昭15・1～3、5～8、11、12、昭16・12に新潮社刊の『愛する人達』に収録された）があげられる。

作品の完成度は別にして、この時期に安定した原稿料収入があったのである。すでに、「女性開眼」の原稿料が総額九〇〇円前後だった可能性を指摘したが、十二年にはこの原稿料の他に、「乙女の港」、「牧歌」の原稿料もあった。婦人雑誌や少女雑誌の原稿料はせいぜい一枚五円前後と推測されるので、川端の執筆方法からみて、経済効率が高かったとは考えにくい。しかし、中里恒子が「乙女の港」・「花日記」を代作したために執筆効率が格段に上昇し、それが好影響を与えた可能性<sup>(10)</sup>がある。

そして、単行本が相次いで出版されたのも大きかった。十二年の経済状態を支えた著作としては、『花のワルツ』（改造社、昭11・12刊、定価2円20銭）、『純粹小説全集』第九卷（有光社、昭12・3刊、定価1円50銭）、『雪国』、『むすめごころ』（竹村書房、昭12・7刊、定価1円30銭）、『女性開眼』（創元社、昭12・12刊、定価1円90銭）、『綴長の探偵』（昭12・12刊、定価2円50銭）があげられる。

十三年は、『抒情歌』（岩波新書、昭13・1刊、定価50銭）、『乙女の港』（実業之日本社、昭13・4刊、定価1円50銭）、『川端康成選集』全九巻が出版された。『川端康成選集』については、印税額、平均発行部数を確認したが、この印税に全く手を付けずに生計が立てられたことは重要である。川端の収入と消費の関係が安定していたことが想像される。なお、『乙女の港』は三七版（昭16・4刊）が横浜市立図書館に所蔵されているので、売行きが好調だった

ことがわかる。<sup>(11)</sup>

昭和十四、十五、十六年に売行き好調とみられる新刊の単行本は見当たらないが、十五年には新潮社から『花のワルツ』（昭和名作選集）2、昭15・2刊、定価1円）、改造社から『川端康成集』（新日本文学全集）2、昭和15・9刊、予約定価1円50銭）が出版されている。『花のワルツ』は県立神奈川近代文学館に一二刷（昭18・2刊）が所蔵されており、『新潮社一〇〇年図書目録』（新潮社、平8・10刊）によれば、『花のワルツ』は「四万部を越したものの一つだった。印税率一〇パーセントとすれば、川端は四〇〇〇円以上を手にしたはずである。

また、「新日本文学全集」については、曾根博義が昭和十七年七月発行の「第十四巻 坪田譲治集」の奥付の発行部数に基づいて、「予約出版である」ため「各巻とも最低一一万三〇〇〇部は出ていた」ことを指摘していた（『新日本文学全集』と戦争下の出版状況』『私の文学涉獵』夏葉社、令3・12刊）。印税率一〇パーセントとすれば、川端は最低でも一万六九五〇円の印税を受け取ったことになる。川端が二つの物件の購入代金を自己資金だけでまかなえたのも当然だった。

そして注目されるのが、昭和十七年である。川端は前年に二ヶ月近くを費やして、満洲を取材した。川端は「北支の旅費は、満蒙毛織で借りる」（秀子宛書簡、昭16・10・10付）ことにしたが、翌年、返済を迫られる。書簡から何かの行き違いがあったことがわかる。川端は秀子に「毛織はこちらが悪い故詫びて御返し下されバ幸ひに候 本二三出るつもりで今月十日と申し置きしがおくれし次第、東峰書房、千円余りお貰ひ下さつてよろしく候」（昭17・4・26付）という指示を書簡で送っていた。

十七年には、『小説の研究（増補改訂）』（第一書房、昭17・4刊、定価1円50銭）、『文章』（東峰書房、昭17・4刊、定価2円30銭）、『川端康成集』（『三代名作全集』、河出書房、昭17・4刊、定価2円50銭）、『美しい旅』（実業之日本

社、昭17・7刊、定価2円）、『高原』（甲鳥書林、昭17・7刊、定価2円30銭）が出版されていた。このうち、『小説の研究』の印税は代作者の伊藤整に入ったと思われる。<sup>(12)</sup>

川端が指示した東峰書房は『文章』をさしている。発行部数は不明であるが、「千円余り」とあるので、印税率一〇パーセントとすると、五〇〇〇部前後となる。ただし、秀子の回想によれば、実際に四月二十七日に支払った金額は「二千円」（川端康成の思い出（二十四））、前掲誌、昭57・1）である。にもかかわらず、秀子の回想からは、もう「千円」必要だったことからくる混乱などはうかがえない。

『高原』も奥付から発行部数が五〇〇〇部だと確認できるので、川端の単行本の発行部数の基準は五〇〇〇部だったと考えられる。川端は単行本を出版すれば一〇〇〇円前後の印税収入が入ることになる。そのうえ、「三代名作全集」の初版発行部数は二万部<sup>(13)</sup>だった。印税率一〇パーセントとすれば、印税は五〇〇〇円となる。こうした安定した収入があれば、もう「千円」必要であるとはわかって、秀子は落ち着いて処理できたはずである。

印税収入の好調さは川端だけに起こったことではなかった。日中戦争の本格化とともに訪れた軍需景気によって、出版ビジネスも好景気を迎えていた。その中心的な商品は文学書だった。文学者の懐は大いに潤っていた。川端が作家たちに軽井沢の別荘などを紹介・周旋した所以があった。

川端の経済的安定が崩れるのは昭和十八年以降である。最大の要因は川端が単行本を出版できなかったことにある。川端は『高原』刊行の後、作文選集である『女性文章』（満洲文藝春秋社、康徳12〔昭20〕・1刊、定価3円20銭）を除けば、二十年十月に『朝雲』（新潮社、定価1円80銭）を出すまで、新しい単行本を出版していなかった。

川端は片岡鉄兵に宛てた書簡の中で、「金の入らぬことは十年目くららだらう。当然の成行だが困ったもの。七八年印税で食ってゐた。これが常態では食へるわけではないが、全然本が出せぬといふでもないから、なんとかなら

う。」(昭18・11・19付)と述べていた。川端は「なんとかならう。」と楽観的な見通しを語っているが、見通し自体は誤っていなかった。戦時下であっても、文学書の出版は好調だったからだ。

伊藤整は、昭和十九年五月三日の「日記」に「昨年の秋頃まであった出版景気、出版インフレーションというものは全く影をひそめた。(中略)昨年、一昨年あたりは私などが文筆で生活してから無いぐらゐの出版景気であった。」『太平洋戦争日記 (三)』新潮社、昭58・10刊)と述べていた。伊藤は先行きの不安を語っているが、十八年の「秋頃まであった出版景気」が壊滅したわけではなかった。

伊藤は十九年に評論集一冊、少女小説一冊を刊行し、再版された著作の印税も含めて、二四二〇円を受け取っていた。これは、十七年に小説集一冊、長編集一冊、評論集二冊、翻訳一冊、十八年に長編集一冊、少年小説一冊、共著一冊を刊行し再版も含めて、それぞれ九〇六〇円、七二九二円の印税を受け取ったことに比較すれば大幅な減収といえるが、印税収入が杜絶したわけではなかったのである。<sup>(14)</sup>

また、上林暁のような私小説作家で遅筆な作家でも、昭和十七年に短編集一冊、評論感想集一冊、十八年に短編集一冊、十九年に短編集一冊、随筆集一冊を出版している。二十年六月に筑摩書房から第九創作集『夏曆』を八〇〇〇部発行するという提案を受けていた。ちなみに、初版の発行部数が奥付から確認できるので印税率を一〇パーセントで計算すると、上林には初版から十七年に一九五〇円、十八年に一一五〇円、十九年に二六二五円の印税収入があったことになる。<sup>(15)</sup>

上林のように、一般的な人気があるとは思われない作家でもコンテンツさえあれば、出版社は単行本を出版していた。川端が単行本を出せなかったのは、コンテンツを用意できなかったためと考えるしかないだろう。川端は「東海道」を「満洲日日新聞」(昭18・7・20〜10・31)に、「故園」を「文芸」(昭18・5〜20・1、11回)に連載をはさ

みながら連載するものの、両者とも未完に終わっている。もちろん、書き下ろしでも原稿さえあれば、出版社は刊行したはずだが、川端は歴史小説を書くための準備をただけで終った。<sup>(16)</sup>川端の執筆方法のマイナス面だけが発揮されたと考えられる。

秀子は「昭和十九年の話」として、「原稿は遅々として書けず、手紙の返事書き」、「他人の原稿読み」で「日も夜も過ぎて、印税はほとんど入らないもので、どうにもなりませんでした。後になって主人と、どうやってあの頃は暮っていたのかしら、とおたがいに不思議がったような日々でした。」（川端康成の思い出（三十一））、前掲誌、昭和57・8）と回想していた。

川端の日記「昭和十九年・昭和二十年 自由日記」（以下の日記の引用も同じ）には、二十年「正月十一日記」として「銀行より三百円引下ぐ。秀子行きて。」とあったり、「一月二十九日記」として「昨日銀行引出の五百円百五十円残る。渋谷西家へ明日払へば残り殆どなし。」とあった。印税や別荘売却の代金によって形成された銀行の貯金を取り崩していたことがうかがえる。

ただし、『雪国』、『乙女の港』、『花のワルツ』（昭和名作選集）などはコンスタントに増刷されていたと思われるし、『愛する人達』は五版、『川端康成集』（三代名作全集）は四版（昭18・5刊）、『高原』は戦時重点版の四版（昭20・2刊、定価2円60銭）が確認できる。『高原』の四版は「一万部増刷」（日記、昭和19年「十二月二十日記」）である。印税率一〇パーセントとすると、印税は税込二六〇〇円である。したがって、印税が全くなかったとは考えにくい。

原稿料についても、「一草一花」（『文藝春秋』昭19・7）の稿料が「三百六十円」（内税金四十三円三十銭差引）「昭和十九年六月十五日日記」、「故園 七」（『文芸』昭19・6）が「稿料八十五円（税金十円二十銭差引）」（六月十

七日記) だった。それぞれ四百字換算で、一枚一〇円と八円だと思われる。したがって、川端は少ない枚数でも発表さえできれば、一定の収入を得ていたはずだ。また、昭和十九年三月に受賞した菊池寛賞の賞金一〇〇〇円も家計の助けになったと思われる。

そう考えれば、川端の文学活動は経済活動として低レベルになったかもしれないが、家計を支えていたといえるだろう。しかし、この時期の経済的危機を救ったのが、不動産売却だったという事実は動かないだろう。印税や原稿料で「二万七千円」の収入を得ることは容易ではない。川端が執筆方法のために自分が経済的な危機に陥ると予見していたとまではいえないだろうが、自己資金が豊富だった昭和十五年に不動産に投資したことは評価されるべきだろう。川端の「衝動買い」が結果的に、もっとも効果的な経済的リターンを生んだのである。

戦中期の川端は、自己資金でまかなえる範囲の投資をし、必要とあれば売却して多額のリターンを獲得した。一定の合理的な判断に基づいた投資を行っていたといえるだろう。その点からいえば、戦中期の川端はホモ・エコノミクスだったのである。その能力は鎌倉文庫に関わっていたときにも発揮されていた。木村徳三は川端について「事に当たつての度胸のよさ、非情さ、判断の速さ、確かさ、大局をつかんだ損得勘定のしたたかさ」から「企業家だったとしても必ず一流の企業家になり得たひと」(川端康成 2)『『文芸編集者』TBSブリタニカ、昭57・6刊)だと評価していた。

しかし、戦後期の川端は大きく変わることになった。昭和二十二年十月四日に池大雅・与謝蕪村の「十便十宜」を新潮社からの借金三十万円で購入したことが大きな転機だった。一定の価値のある不動産なら、比較的容易に転売することも可能だが、高価で貴重な美術品を資金の回収や利益のために転売することは容易ではない。しかも、川端は購入する際の資金を借金でまかなうようになった。おそらく、川端の欲望のあり方も大きく変化したはずだ。例えば、

美術品を購入することはコレクターとして、その美術品を我が物としたいということだろう。不動産と異なって、美術品なら、いわば掌のうえで鑑賞することも可能である。〈所有〉の感覚も変化したことが想像される。

戦後期の川端が描いた軌跡については、稿を改めて論じていきたい。

註

- (1) 文学市場の動向については、拙著『カネと文学 日本近代文学の経済史』（新潮選書、平25・3刊）を参照されたい。
- (2) 秀子は、例えば、昭和10年10月14日付書簡で、二つの原稿料から84円入手したが、「呉服屋三十円、奥田様二十円、魚屋十円、残りは原稿や原稿料を急ぐための車代と、見舞の行き帰りの費用に消えてしまいました。」と報告していた。
- (3) 川端は6月12日付の書簡で秀子の「報告」がないことを怒って、「馬鹿野郎」と叱責している。秀子が10日付で出した手紙が13日の届いたためだった。
- (4) 「今日の作家」は400字換算で約15枚の文芸評論なので、原稿料が140円になるとは思えない。「改造」10月号に発表された「扉」（47枚）も送られていた可能性もある。
- (5) 犀星の別荘について、宍戸實は犀星が「昭和六年に大塚山裾の小径に沿った土地に、数寄屋風の平屋建てで、いかにも金沢人らしい好みと受けとめられる別荘を建てた」として、「庵といったほうが適切かも知れぬ建物で」「純和風別荘としても貴重な存在である。」（『軽井沢別荘史 避暑地百年の歩み』住まいの図書館出版局、昭62・6刊）と評価した。
- (6) 宮原安春『軽井沢物語』（講談社文庫、平6・7刊）第四章を参照されたい。
- (7) 芹沢光治良・堀辰雄については秀子宛書簡（昭15・12・31付、16・1・11付、1・12付）を、中里恒子は昭和17年8月から11月にかけての往復書簡を、林芙美子は昭和17年7月23日付、8月9日付、9月14日付の宛書簡を参照されたい。なお、志賀宛書簡（昭17・9・11付、9・12付、9・24付、10・10付、10・21付、11・1付）から、川端が申込書を整え手続きの進行状況を報告し、別荘の状態を確認して修理等の手配について示唆し、隣家の朝吹家との交渉までしていたことがわかる（『志賀直哉宛書簡』「志賀直哉全集」別巻、岩波書店、昭59・6刊第2刷）。川端は最初の別荘購入の際には不慣れなために混乱した

こともあったが（昭12・9・21付、秀子宛書簡）、五年後には見事な事務能力を発揮していたのである。

(8) これは熱海の不動産で、片岡鉄兵に「例の熱海文士村の地所の件小生昨日土地の責任者と会ひ大要話つた 一口三千円で二百五十乃至三百坪どれもまづ安い この件も紅葉祭後皆に相談するつもり 目下のところ小生の独断でやった 地所ハ一万五百坪あるが先づ文筆業者に限り発起人を選ぶ いかなる湯がどの程度出るかの運ハ未だ分らず 土地見に来ないか」（昭16・1・10付書簡）と報告し勧誘していた。どのような決着となったかは、管見では不明である。

(9) 拙著『カネと文学』第五章三を参照されたい。

(10) 川端は中里に「五十円」（秀子宛書簡、昭12・7・29付）あるいは、「六十円」（秀子、川端宛書簡、昭12・9・27付）程度の代作料を払っていたと思われる。

(11) 中里恒子との間で印税をどう分配していたのかについて、管見では不明である。

(12) 伊藤整『太平洋戦争日記（一）』（新潮社、昭和58・8刊）の昭和17年4月22日に「200」円を受け取る予定であることが記載されていた。

(13) 奥書で発行部数を確認できた『里見弴集』（昭17・5刊）、『徳田秋声集』（昭17・9刊）、『高見順集』（昭18・7刊）はいずれも「二〇〇〇部」だった。

(14) 拙著『カネと文学』第六章二を参照されたい。

(15) 上林の創作集の初版の発行部数は五〇〇〇部で、評論感想集は三〇〇〇部だった。詳しくは拙稿「市場の中の〈私小説家〉——宮内寒弥と上林暁の場合」（学習院大学文学部研究年報）平27・3）を参照されたい。

(16) 片岡鉄平宛書簡（昭19・6・23付）に「新聞小説も一つ二つ約束してゐるが歴史小説を書きたいので調べがつかない。東海道、吉野朝（梨花集、新葉集など）、皇子達を主に）、足利義尚などを書きたい。承久の乱の後、遠島御歌合なども書きたい。」とある。なお、全集はこの書簡を昭和10年とするが、小谷野敦・深澤晴美編『川端康成詳細年譜』（勉誠出版、平28・8刊）に従い、昭和19年のものとした。